

漢法苞徳塾資料	No. 210
区分	論説
タイトル	難經の三焦について
著者	八木素萌
作成日	

1. 金匱要略方の中の一文

張仲景の傷寒雜病論の「金匱要略方」の冒頭の「蔵府経絡先後病脉證第一」の中に「腠者は三焦通会元真之处 為血氣所注 理者は皮膚蔵府之文理也」の文がある。

難經の成立年代と推定されている時期に接近して著された書の文であることから、この文は、三焦に関する当時の認識を、示しているものと考えられる。これによって「有名無形」「外府也」「不屬於蔵」「其府在氣街」など、注釈者の間で議論の多いところが、かなりすっきりと解釈できるように思える。

2. 元気のあかし

「原氣」の衰えは病となり、その「絶」は死となる。故にその消息を候うことが、医の枢要問題となる。難經の診断学はこの点を中軸に記述されていると言ってよい。生きていることとは「腎間之動氣」つまり「生氣之原」「五臟六腑之本」「守邪之神」「人之生命」があることで、その「生氣之原」は「十二経脉之根本」でもあり「呼吸之門」でもあり樹木の根のようなものである。このような「原氣」は、その「別使」（それから別れてそれを作用させる）である三焦の働きによって、主に経脉を介して全身に輸布される。三焦のその機能が、具体的にかつ集約的に表現されるものとして、「原穴」があり「氣街」がある。実態臓器としての臓腑の役割機能と密接不可分なもの、その生理発現機能系である経脉に「守邪之神」「三氣」を輸布している三焦の役割を集約的に表現している所としての「原穴」などであるから、臓腑に病があれば、そこに取穴するのだと言う。

「平人」は「不食飲七日」で、体内に「水穀津液」が尽きるので死ぬとの記述や、「少壯者血氣盛 肌肉滑 氣道通 榮衛之行不失於常 故昼日精夜不寤 老人血氣衰 肌肉不滑 榮衛之道澹 故昼日不能精 夜不能寐也…」(四十六難)の記述は元気の問題には、飲食による養いと、加齢の問題とがあることを、示していると言える。

難經診断学では、五臟の表象として声色臭味液を重んじ、中でも色は、それら全体の代名詞的な位置であつかわれている。また脉状診と共に尺皮診を語って、脉の表象するものと尺皮の表象するものとの間には矛盾がない立場で記述し、また経脉を視ることも記述している。これらは「望」による候いである。尺皮における腠理の様子に関する記述は、具体的で極めて有用である。これらの「色」「脉」「尺皮」の表象は、健康であれば「微」に季節の特性を示すほかには、混然としていて、五臟のいずれの表象があらわれているとも言い難い。然し、病めば、その五臟表象のいずれか、或

はいくつか、判別できるようになる。それは、病の重さの度合いによって、よりはっきりとする。という思想で貫かれている。望診と病症把握と腹診とによって認識されるものが、脈診により認識された所と、矛盾するのが病らしい病であるが、その矛盾が相生的意味合いを帯びる時は、予后良好であるが、相剋的であれば難治であるか死への転期をたどるものである。いずれの臓が病んでいるかを判定し、補瀉等の治方の選択基準とすべきものは、病証把握を基本とする。ということが主張されている。

元気の有無は、脈においては「根本之三脉」つまり陰の部での脈があるかどうか、また「胃之氣」はどうかで候う。四十六難の「血氣盛 肌肉滑 氣道通」は後代にさらに敷衍されて、按撫して、皮と肉とのつながりかたを候う診法が確立されることになる。その萌芽は素問にもあった「彈蹠診」もその一つであろうと言えようか。

脈論では、さらに細かく記述されているが、診病の枢要問題の一つが「原氣」を候うことである。「氣者 人之根本也」(八難)と言うが、それを、つまり「神氣」を候い知るのである。

3. 榮衛と三焦

三焦は「諸氣」＝「三氣」を「主持」「通行」して、百骸に輸布する。その源泉は「生氣之原」であり「腎間之動氣」である。「根」の養いは茎や葉に輸られねばならない。根はまた茎や葉がしっかりしなければ、より張りのびて力強くあることはできない。

「水穀之道路 氣之所終始」とも表現されているのが、三焦である。「上焦…主内而不出」「中焦…主腐熟水穀」「下焦…主分別清濁 主出而不内以伝導」とも三十一難は述べている。これは、「人受氣於穀 穀入於胃乃伝与五臟六腑 五臟六腑皆受於氣 其清者為榮 濁者為衛 榮行脉中 衛行脉外 榮周不息五十而復大会 陰陽相貫如環之無端」(三十難)と呼応している。つまり三焦の「原氣之別使」としての働きによって、「穀」は「腸胃」で「榮・衛」にかわり、経脈を榮周して臓腑内外を養っている。従って「原氣」と「榮」氣と「衛」氣とを混然一体のものとして「主持」し「通行」するのが三焦である。「三氣」とは、この「原」「榮」「衛」の三つであろう。三十一難は三十五難とも密接な関係にある。小腸・大腸・胆・胃・膀胱の職掌と五臟との関係を記し、それらが、赤腸・白腸・青腸・黄腸・黒腸とも呼ぶことを延べたのち「下焦之所治也」と結んでいる。これは三十一難に言う三つの焦の役割のうち、「主分別清濁 主出而不内以伝導」という下焦のこの働きがうまく行かねば、中焦も上焦もうまく働けなくなる為であろう。また、二便の状態を知ることは、元氣の消息を候ううえで大切であることを暗に示したのであろう。三十一難は「三焦者何稟何主何始何終 其治常在何許 可曉以不」との設問にはじまって「上焦者 在心下 下膈 在胃上口」「中焦者 在胃中脘」「下焦者 在齊下 当膀胱上口」と記し、その治は「臏中」「齊旁」「齊下一寸」にあることを述べて「故名曰三焦 其府在氣街」と終わる。

これらは、腸胃がうまく機能して「穀」を「榮」「衛」にかえるためには、三焦の「原氣之別使」としての力を得なければならないこと、その仕組みとして三つの分野とその要所が形成されているということであろう。だから、それらを総体として表現しようとして「故名曰三焦 其府在氣街」と記したものと解される。

4. 経脈と三焦

三十七難に「邪在六府 則陽脈不和 陽脈不和 則氣留之 氣留之 則陽脈盛矣」「邪在五藏 則陰脈不和 陰脈不和 則血留之 血留之 則陰脈盛矣」「陰脈營於五藏 陽脈營於六府 如環之無端…人氣内温於藏府 外濡於腠理」とある。二十四難は五藏の経脈の職掌と絶死の様子と死期とについて、及び三陰脈の絶症と三陽脈の絶症について述べ、経脈と臟腑の不可分性を記している。

経脈と臟腑とは不可分の機能系であり組織的体制である。という思想に拠って、一難の主張は成立する。各経脈には、その消息を示す脈拍部があるのに、寸口の部で全身状態を知り病の予後吉凶を知ることができるのは、寸口部が十二経脈の消息を集約的に表現する所だからである。榮衛は経脈を周る。経脈は太陰に始まって全経脈を経て、また太陰に戻り、そこからまた全身に行く。だから寸口を診ることによって「以決五藏六府死生吉凶之法」となる。十五難では「胃者 水穀之海也 主稟 四時故皆以胃氣為本 是謂四時之變病 死生之要會也」として、四時・五藏の脈を候って病を知るとは、寸口で胃之氣の衰亡を候っているのであること、脈氣の源は水穀述べ養いにあることを述べている。

藏府と不可分な関係にあり、機能的体制である経脈を介して、三焦の「主持」「通行」する「三氣」つまり「原氣」「衛氣」「榮氣」が榮周して体を養い、生活させている。病は経氣の滞りとして表現され、それは脈象にも、皮膚腠理にも反映される。色や形や様子の変化として。

これら全ては「原氣之別使」としての三焦の力によって榮衛が生成されること、それは原氣と一体になって経脈を榮周すること、経脈がこの「三氣」を輸って全身を働かせ養うという、三焦の性質に拠っている。

5. 榮衛の通行に関わるもの

三十二難に「心者血 肺者氣 血為榮 氣為衛 相随上下 謂之榮衛 通行經絡 營周於外 故令心肺在膈上也」とあり、三十五難では「心榮肺衛 通行陽氣 故居在上…」とある。榮衛を経絡に通行させるのは心肺であることを述べている。従って「三焦者 原氣之別使也 主通行三氣 經歷於五藏六府」(六十六難)や「有原氣之別焉 主持諸氣 有名而無形 其經屬手少陽 此外府也…」(三十八難)などという三焦が、榮衛を榮周輸布することとの間は、どういう関係にあると解すのか？三十二難と三十五難の記述は、心肺が榮衛に脈道に行く駆動力を与えていることを示している。では三焦の「主通行」とは何か？

「三氣」は経脈を榮周しているが、四十六難は、それと別な角度から表現している。「血氣盛 肌肉滑 氣道通 榮衛之行不失於常」「血氣衰 肌肉不滑 榮衛之道澇」という、「氣道」とか「榮衛之道」と表現されているものが、通じているか、澇っているかは、肌肉が滑であるか否かに、条件づけられているという認識が示されている。経氣は心肺によって駆動力を得ても、脈道の条件が良好でなければ、その行りは良好にならない、と言うのである。血氣が盛んであれば、肌肉は「滑」となって、氣道条件は良好になり、血氣が衰えれば、肌肉は「不滑」となって、氣道条件は悪くなる。この氣道の条件は、年令と「邪」の有無により、また「穀」による養いの良否によっても変化する。

血気榮衛は「胃」によって生成される、「原氣之別使」である「三焦」によって「胃」は順調に働ける。それで「脉氣」を生成できる。これは「榮衛之道」が良好であるか否かによって、五臓六腑を養い機能させ、腠理肌肉を濡おし温めるという働きが、全うできるかどうかを条件づけられる。経脈のもつこういう二面性は、生・長・成・老・死そして病・傷という、生命の避け難い法則があるので、自家撞着ではない。肌肉は脾胃の主りである。榮衛氣血は、「穀」が「胃」に入り、三焦の「原氣之別使」の力を得て「胃」が働いて、生成するものである。榮衛氣血の周りは、脉道の条件によって左右される。そして、この脉道条件は、血気の盛衰により、この血気の盛衰は生命力により、また食によっても条件づけられている。ということは三焦の「主通行三氣」とは、三焦が「原氣之別使」として、「五蔵六府之本」「十二経脉之原」という力、「守邪之神」という力を、作用させる仕組みである。ということに拠っていると解するのが適当であるだろう。

経脈は「榮衛之道」「氣道」である。それは肌肉・腠理が滑であるか否かによって、その「道」としての条件を左右される。この状態は、腠理の様子に、色に、脈に反映される、「原氣之別使」としての三焦は、「胃」などを「治」めて、榮衛を生成させる。その榮衛は経脈に行って、それを営周する。そして体を養う。その役割をうまくはたすためには、脉道の条件が良好に保たれることが必要である。この所、つまり脉道条件の保持ということにも、榮衛氣血を脾胃に生成させる三焦の役割が働いている。そのこと、つまり、三焦の「通行」とは、脉道の条件を左右することによって、榮衛氣血が脉道を行くための条件に関与することを示していることが、心肺の「通行」とは異なっている。

6. 「外府」と「氣街」

三焦の「原氣之別使」という性質は、四つの面を持っている。

- ①「胃」をうまく働かせて、「穀」を「榮衛」に変え、生成させる面。
- ②その「榮衛」は「原氣」と混然一体のものとなる。「氣」といい「榮衛」といい、時には「血氣」と表現される。それを、経脈に輸り営周させるという面、
- ③この脉氣は駆動力を心肺に与えられるが、その駆動力だけでは、「氣」は全身を養うことができない。脉道の良好な状態が必要である。その脉道条件を左右するものとして機能している面。
- ④「原穴」や「氣街」に、「原氣」を「守邪之神」として、集約的に具現させる役目を担っているという面。

それは他の臓腑のように、局在部位をもたず、また形態を特定できない。故に「有名而無形」と表現するしかあり得ない。

三焦の「原氣之別使」としての性質は、「氣」＝脉氣と、「脉道」と、「原穴」や「氣街」に貫かれているから、「外府也」と言うほかにはない。従って「難経本義」の註解のように、三焦は、外に経脈のみがあって「有名無形」なものであるから、三焦の経脈のことをさして「外府」という、解釈には肯けないものがある。まだ、数歩及んでいないと言える。

「外府也」や「其府在氣街」やで用いている「府」の意味には、臓腑の腑の意味のほかに、「府」と

いう文字のもっている字義のうちのいずれかが、重ね合わされている。「府」には「みやこ」「くら」「やくしょ」「つかさ」などの意味がある。

三焦の機能・性質は、明らかに「陽」性である。然も極めて重要なものであるから、五蔵の重要性と並んで扱えられるべきものである。然し、臓は「陰」であるから、臓とは呼べない。故に、その陽の性質に従って「府」として数えるしかない。その働きが具現しているのは「脉道」であり「原穴」などである。だとすれば、「やくしょ」「つかさ」の字義を、腑の意味で用いているところと、重ね合わせて用いていると解すべきところである。従って「氣街」は「四街者氣之径路也」（『靈枢』動輸第62）「請言氣街 胸氣有街 腹氣有街 頭氣有街 脛氣有街…」（『靈枢』衛氣第52）とあるのと、同義に用いられていると解すべきものである。つまり、氣の街、氣の径路、氣の集約されている格別なところ、などの義である。「難經古義」の中で、膝萬卿は、氣街は原穴のことを指していると書いている。しかしこれは狭い受け取り方であるとあると思う。「氣衝穴」との説もあるが、それのみに限定するのは正しいとは言えない。経脉全体や臓腑の働きに、格別に影響するところの大きい穴位の全体を、指していると見るべきもののように思われる。

7. 腠理と三焦

冒頭に引用した「金匱要略方、卷之上、臟腑経絡先後病脉證 第一」の中の文に、非常に近いことを、張隠庵が言っている。『靈枢』周痺第27の註の中に「真氣者 五蔵元真之氣 三焦通会於肌腠之間 所受於天 与穀氣并而充身者也…」と述べている。また、『靈枢』病伝第42の註では「夫邪之中於人也 始於皮毛 則毛髮折而腠理開 開則邪從毛髮入 入則低深而入於腠理 腠理者 三焦通会元真之處 是以正氣横傾 淫邪泮衍於肌腠之間 則伝流於血脉 而内入於蔵矣 蓋経脉内属於蔵府 外絡於形身 是以経脉受邪 入蔵府為内所内也 淫邪泮衍於肌腠 則傷氣 伝流於血脉而入蔵 則傷神 神氣並傷 故可以致死 而不可以致生…」とも書いている。

腠理は、三焦が「元真」「原氣」を通じ会せしむる所であるという、張仲景の認識は、難經の三焦論をかなりすっきりと理解させる道標となっていると思う。

このように、三焦を解釈し、そしてまた、腎・膀胱・命門・三焦に関連する難經の記述を考え合わせると、『靈枢』本蔵第47の中の「密理厚皮者三焦膀胱厚 麤理薄皮者三焦膀胱薄 疏腠理者三焦膀胱緩 皮急而無毫毛者三焦膀胱急 毫毛美而麤者三焦膀胱直 稀毫毛者三焦膀胱結也」の記述とも相い通ずる面が少なくなく、四十六難の「肌肉滑 氣道通」とか「肌肉不滑 榮衛之道澹」とか言うところとの関連や、難經の診断学で、色を観、尺皮を診、経脉を視ることを言っていることとの関連などにおいて、示唆するところが少なくないように思える。

氣血榮衛の概念は、難經や傷寒雜病論の段階では、必ずしも分離しているとは言い難いが、後代、温病論の成立段階に入ると、明確に区分されるようになり、現代中医学に引き継がれている。また三焦論も、温病論成立を境に、かなり様相を変化させている。難經以前の三焦論とともに、後代の三焦論をも研究し、三焦論の歴史的な変化過程を追って調べることは、興味深い課題であると思う。

8. 現代生理学における皮膚

難経三焦論を検討して、それは肌腠の問題が大きなウエイトをもつものであることを知ったので、現代生理学が皮膚の機能をどのように把握しているのか、今後の方向はどうかを見ておくべきであろうと思う。

今から八～九年以前の四、五月頃の日本経済新聞の記事で、ドライバーの居眠り運転を予防する装置の研究開発のことを報じていた。それは、表皮を少しつよく掌でこすると、すぐに角質層がはがれて、淡明層（透明層）が露出する。これは表皮における液性層であるので、生体イオンの変動を鋭敏にとらえるのに好都合である。これに端子をあてて生体イオンを誘導して静電転換を行い、これを増幅させると、居眠り状態に入る前の生体反応を把握することが出来るので、その時点で何らかの適当な信号にして、ドライバーに自動的に警告を与えるという研究のことであった。既にそのころ、表皮の淡明層が、液性層の体における最外層であること、生理的変化の液性表現の微妙な変動は、当然、この層にも反映され、また、生体の液性調整の機能や、液性防衛の機能も、最外層の液性組織として、ある役割を果たしているだろうと言われていた。また有棘層(ケラチノサイト)は神経細胞に似通った電子伝達などを行っているようだとすることも言われていた。表皮基底層に在るメラニン細胞や、ランゲルハンス細胞は、体表での免疫に何がしかの役割を果たしていることも言われていた。然し、最近になって、表皮は免疫上、非常に重要な役目を果たしていることが明らかになって来た。注目すべき報告論文が出された。サイエンティフィック・アメリカン誌に発表され、それが日本語版サイエンス8月号で翻訳され掲載された論文である。この論文は、皮膚の免疫機能に関する専門研究者である、コロビア大学のR・L・エーデルソンと、その共同研究者のJ・M・フィンクの二人の名で発表されたものである。 結論的な部分から先に紹介すると

「ヒトとマウスの培養ケラチノサイトは、ランゲルハンス細胞が存在しなくても、T細胞の指標となる酵素T d Tを誘導するし、また、これらが、胸腺ホルモンであるサイモポイエチンに似た分子を含む」「マウスのケラチノサイト表面にいったんI a分子が誘導されると、この細胞は、『ランゲルハンス細胞がT細胞に抗原を提示する作用を増強する』事実をつかんでいる」「驚くべきことに、ランゲルハンス細胞を含まない培養細胞は、ランゲルハンス細胞を含んだ培養細胞と同じ量のIL-1を作り出したのである。こうして、IL-1がケラチノサイトによって作られることがわかった……正常なヒトのケラチノサイトもIL-1を作ることを証明している」「表皮の大部分を占めるケラチノサイトは、明らかに免疫学的に重要な働きをもっており、皮膚を保護するケラチンや毛を作り出すだけでなく、皮膚に侵潤してくるTリンパ球に対して、重要な影響を及ぼすホルモン様物質を作っているのである。Tリンパ球に対する影響はかなり広く、T細胞の成熟から、抗原に対する免疫反応の増強にまで及ぶ」「抗原は、ランゲルハンス細胞あるいはグランスタイン細胞のいずれかの樹枝状抗原提示細胞と結合する。ランゲルハンス細胞は、皮膚に浸潤する傾向をもつヘルパーT細胞に、特異的に抗原を提示する。一方、グランスタイン細胞は、サブレッサーT細胞に抗原を提示するようにみえる。このヘルパーとサブレッサーの反応はほぼ平衡状態にあるが、正常な状態では、実質的にヘルパー機能の方が優位である（つまり“正の”反応が全体を占める）。これは皮膚がしばしば遭遇する有害な外敵に反応するのに好都合である。もし、ランゲルハンス細胞が紫外線照射などによって障害されたり、あるいは抗原が直接サブレッサーT細胞サーキットに作用したりす

ると、逆にこのサプレッサー機能が優位になる。ある抗原と反応するようにプログラムされたT細胞は、抗原を提示されると同時に、ケラチノサイトが作るIL-1という第二の補足的シグナルを受ける。そしてIL-1はT細胞に働きかけてIL-2を作らせ、このIL-2は、さらに抗原反応性のT細胞に働きかけてこれを増殖させ、抗原と反応できるT細胞の数を劇的に増加させる。これらのT細胞は、リンパ系にはいって全身に運ばれる」「皮膚に存在する細胞の働きを介さずに抗原がリンパ節に達しても、免疫反応は起こらないのである。抗原に対する免疫能の獲得は、リンパ節ではなく皮膚で直接行われているらしい」「この免疫抑制は、血中にあるサプレッサーT細胞が活性化されるために生じ、脾臓にある抗原反応細胞の活性を低下させる。つまり、皮膚が傷害されると、他の免疫系にも強い影響が及ぶ可能性を示している。皮膚の免疫応答細胞は、生体の他の部分の免疫応答細胞と共同して働いている可能性が考えられる」

これらのほかにも、重要な事柄が述べられているが、この論文の重要性は、成人のリンパ腫のうち、ホジキン氏病より発症頻度の高い皮膚T細胞リンパ腫（CTCL）を追求する過程から、表皮の極めて重要な免疫機能が明らかになって来た。という点にあらう。細胞性免疫を主とするT細胞は、胸腺によって“教育”されて成熟するが、完全な機能発現の為には、いま一段の成熟が必要である。その最終成熟による機能完成と、抗原に対する免疫応答の増強とのためには、ケラチノサイトの、胸腺ホルモン様物質の生成や、IL-1の生成、その他による触発を必要とする、等の点にあらう。また胸腺と皮膚とは遺伝子的にも、構造的にも似かよっていて、それは機能面でも類似している。胸腺上皮細胞の中には明らかな顆粒構造を示すものがあり、それがケラチノサイトにあるケラトヒアリン顆粒と同じもののように電顕像で見えること、なども多面的な示唆に富んだものようである。また細胞性免疫の調整機構もかなりな程度に明らかにされているが、この問題の今後の課題の追究展開から、或いはまた、異なった角度からの皮膚の免疫機能の研究から、恐らく、表皮における液性免疫の仕組みもはっきりとして来ることが、予想される点は、重要であらう。

生体の免疫応答の機構が、正常に働くということは、生命維持上きわめて重要である。この仕組みの機能水準は、肉体的疲労・心労・偏食・衰弱・老化などによって、低下することは、よく知られている。抗病力の低下を、その人の「気配」や、蒙色や、尺皮や、脈や、切経や、腹診やなど、要するに体の外表に表現されるもので、出来るだけ具体的にとらえようとするのが、東洋医学的な診断学であると言ってよい。

「守邪之神」という概念内容のうちの、相当部分は、今日謂うところの「免疫応答の仕組み」が構成していると捉えてよいと思う。

これまで検討して来たように構成されている三焦論は、現代生理学の最尖端の達成の一つから（その研究者達は、それを毛頭も意識していないだろうが）、結果論的には、ある種の重要な支持を獲得しているように、思われてならない。